

日本水<sup>にほんすい</sup>上<sup>じょう</sup>学<sup>が</sup>校<sup>っこう</sup>と伊<sup>い</sup>藤<sup>とう</sup>伝<sup>たえ</sup>先生

## 第一章 準備時代

### 一、水上児童の教育に献身した動機

「開拓者の道は、いばら 莉の道、したた 血汐滴れる道であります。萬難と闘いながら、貧しきを富ませ、憂いを慰め、病人を看とり、悩み苦しむ者のために祈りつつ、敬神愛人の精神に燃えて其の全生涯をもつて、一途に愛の路を歩んで休まないものであります。偉大なる靈魂を神より頂き、神に頼りすぎ、神よりの使命を承継ぎましてその志望を与えられましたならば、之を達成せんとする努力と忍耐とをもつて、続け得るよう上よりの力を祈るものであります。」

これは水上児童教育の開拓者としての伊藤伝先生の根本的態度がよくあらわれた一文である。「あなたがたのからだを神に喜ばれる生きた、聖なる供物として献げなさい。」（ロマ一の一）とキリストの使徒パウロは言っているが、伊藤先生の水上児童への献身はイエス・キリストを通してなされた神の恩寵への応答である。「敬神」と「愛人」、信仰と倫理、即ち神の恩寵と愛の行為は決して離して考えることの出来ないものである。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」（マタイ二五の四〇）と、キリストが教えら

れるように、伊藤先生にとって水上児童への奉仕は、即ちキリストへの奉仕であった。

「水上児童の教育」という志も自分で考えついたものではなく、神に頼り神よりの使命として与えられたものであった。

これが水上児童の教育に献身された信仰的動機であるが、この天地を創造しこれを支配し給う神にもとづく使命感こそ、伊藤先生をして幾多の困難にも負けず、これに打勝たしめた最大の原動力である。

大正二年（1913）八月、当時陸軍一等看護官であった山崎亮太郎氏は或る日、御茶の水川支流の堀割、飯田河岸の橋畔で尿管船の上しんわうせんに学令児童が空しく遊んでいるのを見て大いに嘆き、之を救い教育せんことを思い、独力でこれの調査に当った。約六千七百隻の尿管船をはじめ塵芥船、尿管船、廢土船、砂船などを川筋により明細に調査した。その結果は児童数三千余を数え、学令児童九百五十一名中四百四十名の不学児童のあることが分った。

そこで山崎氏は水上児童の就学出来る方法と施設とを具体的に考え、就学奨励を六代にわたる警視總監、四代の東京府長官に毎年事情を訴え善処分を要請した。

この長い年月にわたる熱心な訴えの結果、大正十年（1921）当時の東京市教育局長守屋恆三郎氏、東京市立特殊学校長今井悦蔵氏、波々伯部金次郎氏等が熟議し、東京市会にこの議を提出したところ社会教育事業としての水上学校案は尚早論に圧せられ市会を通過しなかつた。

そこでこれを補うべく教育者の常道として一日も早く水上児童教育を実現すべく、出来る範囲でこれを断行しようとした。

当時病氣療養のため東京市立軀給小学校を休職し、その病氣もよくなり、東京市立松葉小学校に訓導として復職の予定であった伊藤先生に、視学成田千里氏を通して水上児童教育についての話があり、熟考の上、凡てを捨てて未だかつて誰も試みたことのない水上児童の教育という仕事に献身することになった。これが伊藤先生の水上児童教育に献身された直接の動機である。

## 二、芝浦小学校水上学級と東京水上小学校

先に述べた山崎亮太郎氏は大正八年(1919)、当時東京市立特殊学校として、環境に恵まれない児童の教育を特別の使命として芝浦小学校(現在の竹芝小学校)に事務員として勤め、水上児童の就学を熱心に訴えていた。その結果、大正十年(1921)十月その芝浦小学校に特殊学級として水上学級が編成された。その担任が当時四十一才の伊藤伝先生であった。これは我が国における水上児童教育の最初であり、記念すべきことである。

この学校は先にも述べたように、貧困児童の教育を使命として建てられた特殊学級であったので、宿泊設備はなかったようであるが、入浴、理髪などの設備があり、学用品も一切支給され、給食もなされていたようである。

当時水上児童の一部は芝浦小学校の他に深川にあった私立福島小学校に通学していた。しかし、仕事の都合で船の位置が常に移動し、相当遠くから朝早く起き通学しなければならなかった。そのみならず学校から帰ったら船が居らず、岸壁や材木の陰で野宿することも度々であった。

一方、東京水上警察署長をしていた寺阪藤楠氏は、水上児童の教育について熱心に考えていた。寺阪氏は大正十五年(1926)五月職を退かれると共に、回漕店主荒川敬氏の主唱を入れて、水上生活者の福祉増進をはかる目的をもって水上協会を設立し、昭和二年(1927)八月その理事長となった。

芝浦小学校の水上学級の担任として水上児童の教育に数年の年を遇され、その徹底をはかるためには是非、寄宿舎を併設した水上児童のための学校を創設しなければならないと考えて居られた伊藤先生は、寺阪氏と色々熟議、奔走され、昭和四年(1929)十二月現在の東京水上小学校月島寮のある当時震災後建てられた東京市立月島第二尋常小学校仮校舎と校舎と校地を東京市より無償で貸与してもらった。

昭和五年(1930)水上協会理事長内田嘉吉氏、寺阪理事長、また高松宮、その他三菱、安田などの富豪の援助もあり、東京水上小学校として同年八月設立認可を受け、九月五日開校するを得た。

水上協会の理事長寺阪藤楠氏学校長となり伊藤先生は訓導兼主事として、三、四、五、六学年を担当された。最初は收容児童三十二

名で、これを二学級に分け、一、二年生を佐藤みよへ先生が受持たれた。

これより十数年間、昭和十七年(1942)横浜に日本水上学校を創立するために退職されるまで、伊藤先生は名利の嵐吹きすさぶ中に報いを望まず、唯患ただまれぬ水上児童の教育に黙々として専心された。

学校長寺阪氏は教育に關しては素人であつたので、学校教育、寄宿生活の指導等児童の教護は一切伊藤先生が当り、寺阪氏は当時書記をしていた有野正治氏と共に、主として財政面からの経営を受持たれた。水上生活者の福祉、特に水上児童に教育の機会を与えるとの共通の事業に協同して当たり、学校の設立をみるに至つたが、ここで純粹に教育的立場をとられた伊藤先生と、むしろ運営經理を重視された校長との間は、設立以降は、必ずしも常に一心とは云い難かつたようで、例えば、当時四円五十銭であつた食費の納入不能児童の退学問題が起きた時、伊藤先生は教育者として、又水上児童の不就学児の根絶という学校の設立の趣旨からも退学させることには、強い反対を唱え、校長と書記らと意見が対立した。

また開校当時から可成りかなりの反対を受けたのは伊藤先生のキリスト教主義の教育であつた。開校以来伊藤先生は寮に泊り込んで児童と共に過され、夕食後の一時など讚美歌をうたい、ダビデとゴリアテの話などを面白くされていた。また朝夕の集りにも聖書の話をし、食前には感謝の祈を捧げられた。これらのことに反対が起り、これを中止するように言われたのである。その反対もキリスト教そのもの

のに対する反対というよりも、名利に走らず、酒も嗜たしなまず、不義との妥協を許さないクリスチャンである伊藤先生が煙い存在であつたのである。故に伊藤先生に対する陰の策動は可成り激しかった。例えば一人の女教師は伊藤先生の宗教活動をおさえるために就任させられた。しかしこの先生は反対に伊藤先生の人格の崇高さに打たれ、それに感化された。

このような中に伊藤先生は正しく審き給う神に凡てすべてを委ね、これらの矛盾に競い立とうとする父兄を鎮め、争わず、決して争わず、じつと我慢された。そのみでなく上級学校の進学、或いは就職などに際して親身になつて児童の指導に当り、多くの人々が上級学校に学ぶことが出来た。

このような中にも東京水上小学校は昭和七年(1932)五月二十七日高松宮兩殿下が来られたことなどもあり、その存在も認められ、年々児童も職員も増加し内容も充実にいった。そして昭和十五年(1940)頃、東京市では永代橋えいたばし附近に別に水上学校の建設を計画した。ここに東京市移管の問題が起り、伊藤先生は賛成ではなかつたが、財政面の幸福ということを考え現状を憂慮されて移管に同意された。そして昭和十五年(1940)三月三十一日、東京水上小学校は廃校となり、同年に小学校に類する各種学校として東京市立水上学校が生れ、東京市直営に移つた。

### 三、生 い 立 ち

伊藤伝先生は明治十三年(1880)三月一日現在の山形県新庄市常盤町に、父長右衛門、母ますの次男、八番目の子供として生れた。父長右衛門氏は大家を構え、四十人程の近所の小母さんたちに繭から生糸をとる仕事をさせ、それを販売して一家をたてていた。

伊藤先生が生れた頃、宮城という口ききの青年に一年間の努力の結晶である生糸の販売を委託したところ、その売上金の全部を持って北海道に高飛びされてしまった。このような事から家運が傾き始め、父長右衛門氏は自暴自棄となり、また酒乱でもあったので家庭を顧みず、伊藤先生が五才から七才までの間、母ますさんは女兒三人を連れて里に帰り、父と男の兄弟、即ち五才違いの兄義三郎氏と伊藤先生は家に残り、時々母の顔を見に行き、餅などをもらって帰った。当時先生はよく中等五級の兄と一緒に学校に行き、兄の机の隣に座ることが度々あった。このような事の中に住みなれて来た大きな家は病院に売られてしまった。

そこで明治二十三年(1890)六月伊藤先生が十才の時、兄の義三郎氏は十六才であったが、一家の再興を計り屯田兵としての資格取得のため、二つ年を増し加えて一家の柱とした屯田兵を志願し、北海道釧路国厚岸郡太田村に一家移住した。

伊藤先生は広々とした北海道の原野に大きな希望の持たれる生活の中に五年の歳月を送られた。五千坪に及ぶ広い土地に家族の者の

手によって次々と鍬が入れられ、見る見るうちにこの全部を開墾し、更に少し離れた所に五千坪の土地を開墾し、父長右衛門氏は一回、母ますさんは毎年、北海道開拓者の模範としてその勤勉と功勞を時の北海道屯田兵司令官永山武四郎氏より表彰された。兄義三郎氏も十六才の身には少し重いドイツ製歩兵銃を肩にして一日中練兵し、肩が痛いと言いつつも休む暇なく、銃と鍬とを持ち替えて農耕に日の暮れる迄従事した。このような環境の中に、十才から十五才までの少年時代を送られた伊藤先生に後年、勤勞を尊び、特に山羊を飼い土に親しむ心持が育てられたことであろう。

明治二十八年(1895)十五才の時勉學を志し、父母のもとを離れて釧路より船で、当時東京麻布の戸沢家邸内に戸沢家の勤定方兼書役を仰せつかり士格に登用され一家をなしていた叔父一蔵氏を頼り、北海道を後にして上京した先生は、直ちに私立正則中学校に学び、ついで明治三十四年(1901)三月には、私立海城中学校を卒業された。この間明治三十一年(1898)五月には通信省文官普通試験に合格された。

通信省電話交換局に交換手として、明治三十四年(1901)三月男子交換手が廃止される迄勤め乍ら勉學した。これは現代のアルバイト学生であり、当時夜だけは男子交換手であって、昼間は中学なり、大学、専門学校に通學出来る条件のよいアルバイトであったので志望旺盛の苦學生が競ってこの職についた。当時の親友の一人に「大菩薩峠」著作者で有名な中里介山氏がある。その頃はキリスト

教社会主義の盛んな時で、先生は日曜日の朝、退庁すると中里介山氏とよく教会に行つて安部磯雄氏などの講演や説教をきいた。そして明治三十三年(1900)三月には日本基督ユニテリヤン神学校に学ばれた。

海城中学校を卒業された伊藤先生は陸軍士官学校進学の希望もあつたのであるが、少しの間小学校教師を勤めようと考え、冒険と思われる武者修行を計画した。それは書籍二十冊程と鉄亜鈴八箇、其の他を入れた八貫目に及ぶ荷物を背に東海道を下る徒歩旅行であつた。至る所の村々の学校を尋ねて教員の欠員を捜しつつ、箱根を越えて、夜中三島の先、牛臥我入道に至り、疲れもあつて海岸の砂浜に横になつた。そこに眠る間に潮が次第に満ちて来て、足を越え、まさに腰をひたさんとするにあい、此処こそ我が留るべき地なりと思つて、視学松崎氏を尋ね教員就職を依頼した。そして合計三十六校を尋ねた末、遂に静岡県駿東郡柳原小学校に就職した。これは明治三十四年(1901)五月であつた。この学校で一年間伊藤先生は狂える如く教育に熱中した。それと共に、此処では当時第一高等学校の生徒であつた嶺直貫氏と共に、キリストの福音を熱心に説いて伝道した。

明治三十五年(1902)夏、東京に帰つて、当時麻布本村町の曹溪寺内にあつた麻布区代用慈育小学校に就職した。これも麻布、赤坂の三十八の学校を尋ね歩いた末の就職であつた。この学校は曹洞宗の学校であつた。その頃のことについて「この学校は仏教の人々、住職及び寺に呼吸する人々のみなりけるに、我はキリスト教に一躍

進せしは神が生徒中に聖書販売人の子女(今富姉)を四年生に送りしことなり。この子供が旧新約聖書を持参して購読をすすむ。これを読むに及び、勇氣百倍、七、八人の教員中只一人これを励み、彼らに負けざる勉強を励むに至る。神は如何なる所にも道を備え給うことを感謝する」と記している。

慈育小学校に勤務すること三年、訓導兼校長となつたが、この間東京府管内の尋常小学校本科正教員の免許状を取得したので、明治三十八年(1905)七月、東京市立愛宕小学校に移る。ここで二年間教鞭をとり、明治四十年(1907)十二月陸軍一年志願兵として入隊した。軍隊において銃剣術のやりすぎから胸を悪くし、半年程で現役免除、明治四十一年(1908)十二月より東京市韞絵小学校に奉職、大正十年(1921)病氣のため休職する迄十数年間教育に従事した。病氣療養のため病院にあり、また葉山に転地し殆んど体の調子も回復したころ先に述べた芝浦小学校水上学級の話があつたのである。

この間、叔父一蔵氏が長男禎太郎氏を十五才にして失つたため、明治三十三年(1900)十一月、伊藤先生は、伊藤一蔵氏の養子となつた。そして一蔵氏長女せん姉と明治四十二年(1909)十一月十五日結婚した。伊藤先生二十九才、せん姉二十二才の時であつた。

## 第二章 山下町時代

### 一、準備

「神によりて望を抱け」（昭和十七年（1942）書初め句）神田 Y M C A の早天祈禱会に出席し「言いつくし難き神の賜物」に感謝しつつ今年こそ横浜に水上学校を開校しようとの大きな望みと強い信仰とをもって、昭和十七年（1942）の春を伊藤先生は仰えた。

此頃の日記の一節に「この頃自分は朝起きる時非常にねむくて少年時代に帰った心地がする。今年はしもやけも沢山出来てきた。物事もよく忘れる。ボンヤリする。電車を虎の門で乗換忘れて溜池の方まで連れて行かれること一度ならず続けざまだ。大いに戒心すべきである。神に身を献げて悔なき、汚れなき身となって、潔き宮として仕えねばならぬ筈だ。

横浜に水上学校が出来たような気になって楽になった余り早まっではならぬ。安心などしては早い。祈れ、祈り求めよ。これで凡てを解決に至らしめるのだ。」（一月十七日）とある。ここに六十四才の身に鞭打ち、神のために凡てを捧げて尽す主の僕の敬虔な姿を見る事が出来る。何ら具体的なものも持たず、唯生ける神を信じて祈る伊藤先生の毎日は「腰をひきからげて丈夫の如くせよ、勇

ましくあれ」と日記にしろされた聖書の一句より感じられるように、丁度イスラエルの「出エジプト」（出エジプト記十二章参照）を思わしめる緊張したものであった。

このような中に伊藤先生は足を棒にして学校の候補地を捜し歩き、三井報恩会などに設立資金を願い求めて、最初、鶴見区末吉町と南区上大岡六三二の土地が候補地として考えられていた。

三月三日、日本水上学校設立を理由に東京水上小学校に辞職願を出し、三月二十五日の卒業式を最後に退職した。その日東京水上学校後援会より慰労金として金千円也をもらったのであるが、これは「新誕生学校養育費」として献げられた。また、伊藤先生が愛宕小学校高等一、二年（現在の小学校五、六年）の担任であった時の生徒であった岩垂好徳氏は父を記念して金千円也を先生の事業のために献げた。これが日本水上学校設立のための「初徳」基金となった。また神田 Y M C A の早天祈禱会で常に祈りを共された吉田清太郎先生の献げられた金五円也も「レプタ二つ」として伊藤先生を非常に勇気づけた。

同郷の元横浜市助役榎岡徹氏（当時六角橋在住）の温い助力により、五月初旬絹業協会借家「印度人商館」（中区山下町七十六）を借りることに決定した。

この場所は谷戸橋より桜木町方面に向う通しの元シェル石油会社の前を南京町の方へ少し入った所で、現在亀井倉庫の立っている場所である。此処は外国人商社の多くあった所で、大東亜戦争勃発の

ため外国人が本国に引揚げ空屋になっていた家屋が多くあった。

この印度人商館はコンクリート二階建、九十六坪の建物で下が五部屋、二階が六部屋あった。近所の建物が隣接していたので部屋はあまり明るくなかった。

この印度人商館に五月二十七日の海軍記念日に、「日本水上学校 仮校舎」という標札がはられ、新しい机も三十脚準備された。

## 二、開 校

横浜における水上児童のための施設は昭和五年(1930)四月三日京浜船夫組合の一事業として(保土ヶ谷区井土ヶ谷に水上児童寄宿舎が創設され、昭和九年(1934)四月より横浜市会議員森栄一氏の経営に移され新子安において継げられた。約二十名から三十名の小学校児童を收容し、近くの子安こやす小学校に通学させていたが次第に縮小され、その事情は明らかでないが昭和十七年(1942)七月遂に閉鎖されるに至った。

このような時に当り、日本水上学校の開校は水上児童にとって又とない福音であった。日本は四面海に囲まれた国である。故にその発展は海より外にないと考えた伊藤先生は、小学校教育だけでなく外洋を志す船員教育を理想とされた。

それ故に日本水上学校の開校を「海の記念日」である七月二十日にした。

また、「横浜」水上学校とせず「日本水上学校」とした点にも伊

藤先生の神によって与えられた望の大きさを窺うかがい知ることが出来る。先生は伊藤先生一人、生徒は当時小学校六年の織田勇、三木康男(三年)、三木政江(一年)の三人であった。横浜市民の大部分はこの小さな学校の誕生は知らなかったであろう。しかし、神はどんなにか、伊藤先生の信仰の故にこの開校を喜ばれたことであろう。

その日の新聞は「ハマに水上学校——船頭さんの子女に養護教育、伊藤伝氏の温い施設」という見出しで次のように報じている。

「船頭さんの子女で虚弱な者を養護教育する特殊学校がハマ市内に設立され横浜港に明るい話題を投げている。——同校は学校教育に恵まれない水上児童の福祉増進を図らんとするもので、国民学校に通学出来る水上児童生徒を除く知能の遅れた不幸な子供や、今まで教育を受ける機会を得なかった超年児童をも收容、個人個人の性格を活かす寺小屋式教育を施すものである。同仮校舎内に男女別寄宿舎を併置して共に学び、共に寝るの楽しい楽園を建設するのだ。月謝は食費原料代として月九円という安直さである。なお同校は特殊学校として設立認可を県に申請、なるだけ早く開校するよう準備を進めている。



### 三、高松宮

開校間もない八月二十九日に高松宮が妃殿下とお揃いで、海洋競技場においてになった折水上学校にお立寄りになった。

高松宮がまだ仮校舎の日本水上学校に來られたのには由縁がある。高松宮が御成婚当時の昭和五年（1930）、丁度伊藤先生が東京水上学校を月島に創立された時、宮様はこれに金品を贈り、また高さ六尺の本箱を八個、備品として寄贈されて水上児童に特に深い関心を持たれた。伊藤先生が東京を去り、横浜に水上学校を創設するに際し宮家を訪れ挨拶をされたことを忘れずに妃殿下お揃いの御微行となったのである。

皇族の台臨ということは当時においては非常なことで、一般市民はもとより、神奈川県や、横浜市などに対する反響は大きなものがあった。

その日の模様を朝日新聞は「水上児童に仁慈——御微行で横浜水上校へ御成り」という見出しで次のように報じている。

「高松宮、同妃殿下には去る二十九日横浜海洋道場の海洋競技場に台臨遊ばされ、約三時間にわたり熱心に御観覧遊ばされ同日午後三時競技場を御発御帰邸の途につかせられたが、その御帰途両殿下には山内別当をしたがえさせられるのみの御微行にて、中区山下町七六の古びた印度人商館に仮の施設を施したのみのむさくるしい日本水上学校に成らせられた。恐縮感激する伊藤伝校長の御案内を受け

させられつつ両殿下には水上生活者の子供達が机を並べる教室に御入り遊ばされ「横浜には水上生活者の子弟は現在何人居るか」  
「子供達は親達の乗る船と共に転々と東京と横浜を往復しているのか」  
「子供たちの取扱いはどうゆうふうにやって居るか」と恵まれぬ水上生活者の子弟たちの上に深い御仁慈と御関心を注がせ給い種々御下問遊ばされ、伊藤校長に「一生懸命やるように」と有難き御言葉を賜わり御気嫌うるわしく御帰還遊ばされた」（九月一日朝日）

### 四、生活

開校と同時に当時四年の山田勇君をはじめ篠崎文代（三年）、岩崎静江（二年）、秋本功（一年）、大須賀きよ子（五年）、大糰時子（五年）など続々と入学、職員も津田富三、梶山朝子、清水風心の諸先生、炊事の方に東京水上を卒業された露崎みきさんなど伊藤先生の事業に賛同する熱心な人々が与えられ日本水上学校の歩みが始められた。

伊藤先生は二階の一番奥にあった。広さ三畳位のタイル張りの元の浴室を校長室兼寢室とされ、実に質素な生活をされていた。露崎さんが來られる前までは朝早く起きて児童の身の廻りの世話から食事、授業まで一切して居られた。

先生の一日は床の中の「豚体操」（西式健康法か）で始まり、起床後すぐ児童と共に山下公園に行き朝の体操をした。そして礼拝、食事をすませ授業である。津田先生が來られてからは学校のことは

津田先生にまかせ、毎日、県庁、市役所、船会社を訪れ、子供たちの養育費並びに理想の地の校舎新築の資金を集めるため歩かれた。その為かその頃の日記には度度「靴修理した」ということが書かれている。

授業は後になって下の教室と二階の教室の二つのクラスに分れて行なわれたが、最初は一クラスで行なわれた。

子供たちにとって色々楽しいことはあったが、それは食事と、オヤツであった。当時食事は桜木町にあった横浜栄養食調理配給組合より「栄養食」を配達してもらっていた。そして下の一番奥にあった校長先生の作った歌がぐるつと周囲にはつてある食堂で、その歌をうたつてから楽しく食べた。その歌は「人となろうと思うなら、気のつくことはすぐになせ気がとがめたらせぬがよい。」といった教訓的な替え歌で、この歌などは二十四番までであるという長いものであった。

また、当時おばさま（伊藤先生夫人）は東京横浜間を多い時には一日二往復もされ、雨の日も風の日も色々と必要なものを運ばれた。オヤツもその中の一つであった。故におばさまが来ることは子供達にはオヤツが来ることで楽しみだった。特に「いなごの甘煮が忘れられないと、卒業生の一人は語っている。

楽しみの一つに夕食後の紙芝居があった。伊藤先生は「ダビデ、ヨセフ、ダニエルなどの旧約聖書の物語、今井よね作の「イエス伝」更に「石井十次」「賀川豊彦」など毎日のように行なった。それ故自然同じものを何度も見る結果となったが、先生は裏の字を読むの

でなく、絵を見乍ら自分で話をするのである。一枚の絵で長い話をされ、その話は子供たちにとって非常に面白いものであったらしく、当時の卒業生の凡てが題名は勿論、伊藤先生の一举手、一投足まで覚えていた。これが言わば聖書学課の時間であった。

この他宗教と考えられるものは朝夕の礼拝がある。これは食前に礼拝唇により行なわれ、聖書を輪読し、或る時には聖句を暗誦して祈るというものであった。またこの他救世軍の小川先生が度々来校され、いつもニコニコした顔で「主われを愛す」という讚美歌をうたつては紙芝居をされた。

しかし、これらの中に勝つて伊藤先生の人格接触により、そこから出る「キリストの薫」による感化は大きなものであり、これこそ真の宗教と考えられた。当年日曜日には海岸教会の日曜学校に出席していた。

このような生活の中に、最初のクリスマスを迎え、礼拝に続いて津田先生が「マタイによる福音書二十五章三十一〜四十六節にもとづいて作った「ささやかなる雫すら」という劇などをして主の御降誕をお祝いした。又楽しい三溪園、鎌倉などの遠足もあり、三月の卒業式には織田勇、大須賀きよ子、の二名の最初の卒業生を出し、四月の入学式には山田茂君他八名の新入生を迎えた。

津田先生は色々な御都合で三月に退職され、新しく河村寿賀代、俊郎先生を迎え、クラスも二つにして授業が続けられた。

昭和十八年（1943）四月十三日には教育社会事業として神奈川県知

事より認可された。

こめような歩みをたどり、第一回の創立記念日を迎え、教師一名生徒三名で始まった日本水上学校は教師五名、生徒三十名となり、神の御護りと祝福を心から感謝された。この一年の歩みの中に多くの方々の折りと、具体的な援助のあったことを忘れることは出来ない。開校間もない頃、学校ではオルガンがなく音楽の授業に大変困っていた。その時神奈川区旭ヶ丘にお住いの指路教会長老、門屋直亮氏は御自分のオルガンを貸して下さった。また、先に述べた小川先生はもとより、伊藤先生の親友中里介山氏などは時折尋ねて来られ、子供たちにと言って粟を持って来たり、献金をされたりした。その他吉田清太郎、中山良馬、篠遠喜人の諸氏の温い献金も忘れることは出来ない。また、近所に住んで居られた印度貿易商のペスマル氏は遠足、創立記念日、その他折ある毎に、金品など心のこもった贈物をされた。また、東京水上学校の同窓会の人々は大鏡と大太鼓を贈られた。この太鼓を贈られた。この太鼓には両側に「神賦」「前進」と大書され時報用として後々まで使用された。

## 五、日本水上児童愛育会

昭和十七年(1942)八月二十九日高松宮の御微行の台臨により、日本水上学校の助成について近藤知事、半井市長は殿下の思召しに答えるべく伊藤先生と共に対策を講じ、県市各界の代表を会員とする後援会、財団法人組織横浜市立案などが議に上ったが、結局伊藤先生の希望により財団法人日本水上児童愛育会を組織することになり、昭和十七年(1942)十一月本町の銀行集会所において発会式を挙行した。会長には水上児童に馴染みの深い海軍から、我が国潜水艦建造の祖と言われる小栗孝三郎海軍大将、副会長には小野徳三郎海軍中将をはじめ、理事には浦賀船渠、横浜港運、古河電気、日本鋼管、日本飛行機、三菱重工横浜造船所など各社長はじめ、顧問には当時の貴族院議員平沼亮三氏はじめ県知事、市長などの顔が見えた。

最初は現在校舎が狭いので早速積極的活動に乗出し、出来れば愛育会の基礎の定まる昭和十八年(1943)には海を見下す山手高台に、五十名程度収容出来る寄宿舎付新校舎の建築も計画され、問題の敷地についても伊藤先生に何処でも好きな処を選ぶようにと大変な熱の入れ方であった。しかし結果においては余り具体的な援助は見られなかった。

最初の規約は伊藤先生の教え子で当時横浜保護監察所長をしていた渡辺要氏の草案により出来た。それによると会員は毎月さしおつ出す

る正会員、毎月十円を出す維持会員、毎月百円を出す名誉会員などがあり、日本鋼管、三菱重工横浜造船所、横浜港運、船舶運営会などをはじめとして多くの会員が与えられ、多い年には十五名、金額にして約三万円の援助があった。しかし、戦時中であり夫々忙しく唯寄附金を出すということに終り、余り具体的な援助はなく伊藤先生の苦勞は並大抵のものではなかった。

## 六、移 転

昭和十八年(1943)夏頃、日本水上学校仮校舎であった印度人商館の所有者であった日本飛行機株式会社が、これを社員の寮にするためか、或いは現在この七六番地一帯を所有している亀井倉庫株式会社が買上げたためか、その理由は明かでないが、立退きを命ぜられた。

このことは学校にとって非常に困ったことで伊藤先生は当時空き寺になっていた増徳院また雪見橋の理容学校跡など、毎日足を捧にして捜し歩かれた。そして、十月六日元街小学校側の「ユニオン・チャーチ」が敵産建物として空いていることを知り、これが最後まで残っていたのは神の備え給うものであると非常に喜んだ。早速、当時これを保管していた三井信託宛に敵産建物譲受けの申込をした。

しかし、競争者などありすぐに決定出来なかった。しかし、立退きは迫られているので取敢えず十二月二十三日、中

区山下町三十三番地、現在のホテル・ニューグランドの裏にあたる日本飛行機所有の建物に移転した。

この建物はとても大きなものであり、半分は倉庫に使われ、引越を終った二十四日夜、広々としたきれいな食堂で、大岡教会田中牧師などお招きし、樅の木の代りに杉の木が飾られクリスマスのお祝いがなされた。そして次の日から学校は冬休みに入った。

この間十一月に炊事を担当していた露崎みき先生が退職され、十二月の始めに林新村先生と宮川和子先生の就任を見た。

この第二校舎の生活は非常に短い期間であった。譲受けの交渉を進めていた山手のユニオン・チャーチがいよいよ譲渡しに決定し、昭和十九年(1944)二月五日、二度目の移転を行なった。人夫を四人頼み、生徒全部でピアノ・大鏡だけ残して全部運び終り、移転式をして神に感謝した。

その夜、伊藤先生と林先生は二人で讚美歌をうたい、聖書を開いて共に祈った。その時開かれた聖書の箇所は「神はあなたがたをかえりみて下さるのであるから、自分の思いわずらいをいっさい神にゆだねるがよい」というペテロ第一の手紙五章七節の言葉であった。

### 第三章 ユニオン・チャーチ時代

この時代は水上学校にとって苦難の時代であった。戦争は次第に激しさを加え、「疎開」が行なわれた。この時代の区分は「疎開まで」と「疎開」（羽村疎開学園）「疎開から帰って」という三つの時代に分けられる。

#### 一、疎開まで

この時代は伊藤先生にとっても内外ともに多難な時代であった。戦争の激化にもなつて食糧事情も非常に悪くなつて来た。そのため学校内で盗難事件が絶えず、このため伊藤先生は大へん心を痛められた。道徳的混乱は水上学校のみならず我が国全般の傾向であったが、S君は特にひどく、夜中に台所に忍び込み、お鉢の飯三人分を天ぷらと佃煮をお菜にして食べるということは度々で、その他にパン券やお金がよく無くなった。この頃の伊藤先生の日記に「盗賊を飼ひ置くが如し、祈るより他になし」と嘆き、その処置として「S児は人格を尊重して行かねば直らず、彼を尊くし、自ら尊いものたることの自覚を起さざるべからず」と記している。

また、此の頃は職員の間的气氛も険悪で「上に職員愛に欠乏し、下に乱るるは当然なり。これ失敗と言わずして何ぞや。事業の失敗

は人格の失敗なりとの金言、身に通して新に感ず」と記している。

更に加えて学校、寮舎に使用中の建物購入という問題で経済的にも非常な苦勞をされた。山下町時代と同じく林先生らに授業の方は委ね、伊藤先生は毎日靴をへらして県、市、各船会社をまわり、資金の獲得に奔走された。そして五月には父より譲り受けた家屋を一万二千元で人手に渡し、当時敵産建物として国の管理下にあったユニオン・チャーチを四万五千元、横浜市金庫に寄附という形式で使用する事になった。

このような困難の中に、三月には第二回の卒業式を迎え、藤田富夫、大糰時子の二人の卒業生を上級学校に送り出した。

更に七月には創立第二周年の記念日を祝い、職員一名、児童三名で始まった日本水上学校は満二才にして職員八名、児童三十三名と成長發展した。

ユニオン・チャーチは元町より代官坂を上り、トンネルに入らず上の道を横切つた左側にあつた。約三百四十坪の土地と三階建て元教会堂（八十四坪）、二階建牧師館（五十五坪）、平屋日本家屋（十六・五坪）の三棟があり、運動場としては少し狭いが上の道路に面して広場があつた。

ユニオン・チャーチに移つて間もなく宮川先生がおやめになり、新しく島貫美津先生と春名直子先生が就任された。三月には多摩川園に遠足に行き、六月にも横須賀の三笠艦に行き楽しい一日を過ぎた。また学校の近くの海軍病院（現在の山手病院）で歌や遊び、上級生男子は勝海舟の劇をして慰問した。また八月には河村寿賀代、

俊郎先生が退職され、青木幾先生が就任された。

この年は伊藤先生にとつて実に多難な一年であった。六十六才にして前途成算も立たず、食うに文なくしては浮ぶに瀬ありや、静かに再考すべきである”(十一月二十五日の日記)と何度か横浜市への移管を考えられたが、戦時でもあり市では敬遠して引受けなかつた。

## 二、疎 開 (羽村)

“敗戦”という歴史的転換の時を持つ昭和二十年(1945)、日本水上学校も国家と共に幾多の困難と変化とを余儀なくされた。

この年の書初めに伊藤先生は“われら四方より患難を受くれども窮せず、詮方つくれども希望を失わず”(コリント前書四の八)と書き神より与えられた大きな希望を持って新しい年を迎えられた。

昭和十九年(1944)より引続いて戦況は日本の不利の中に展開し、敵はサイパンを攻略、刻々と本土に迫りつつあった。空襲は次第に激しくなりつつあったので、児童の安全を計り、一月林先生以下十七名の三年以上の上級生を東京都西多摩郡羽村四十七、”成進寮”に疎開させた。

この寮は下田伊左右門氏の創立にかかり、所謂秩父銘仙の名で有名なこの地の桑の栽培、養蚕、絹織物の改善、増産を計り、併せて子弟の教育を此処で行なった。この効果著しく遂に八王子織物として名声を博するようになると言った由緒ある所であった。下田氏没

後、この後を嗣ぐものがなく、この寮舎も荒れるに任せてあった。

それを中里介山氏が自邸の一角に移し、それを保存、記念すると共に、新たに西陣村塾を作り、下田氏の事業を追悼し村の教化につとめた。ここに日本水上学校の疎開学園を開いた。雑炊をすすり、甘藷を掘り、米の花を見、月を眺めての田圃生活は非常に楽しいものであった。戦争の激化と共に極度の食糧難で、先生方は食糧の獲得に随分苦労された。燃料も不足勝ちで、寒中の疎開であったので暖房には困ったが、日当りのよい部屋が多かったので助かった。入浴も思うように出来なかつたが、親切な村の人の協力によりよくもらい風呂に行つた。その他、中里氏の邸内の道場に居た兵隊さんたちの親切により、色々な苦しいことの中にも一家のような親しさの中に時を過した。

四月二十日、青木先生と一緒に横浜に残っていた下級生十三名もここに疎開し、全生徒が一堂に会するに至った。

この間、家庭や児童の特別な事情で疎開出来ない七名の児童には、本校で伊藤先生と島貫先生がその指導に当った。

五月二十九日朝、警戒警報になり、九時頃横浜全市にわたつて空襲を受け、水上学校も先ず牧師館であった第二校舎に八発の焼夷弾を受け、屋根数ヶ所より火をふき殆んど焼けてしまった。しかし海軍警備隊により消し止められ全焼をまぬかれた。一旦空襲警報が解除された後で残念であったが、第一校舎は十数発の焼夷弾を受けて全焼した。しかし不幸中の幸として、日本家屋は焼け残った。

この間三月に疎開学園での卒業式が行なわれ、山田勇君が卒業し

た。五月には国領律子先生が就任された。また七月には疎開前、また疎開中よく尽力された林新村先生が退職され、これに代って千葉周邦先生が就任された。また春名先生は十月に退職された。

八月十五日に悪夢のような戦争は終りを告げ、暫く虚脱状態が続いたが、すぐ平常にもどり、復興の兆も見えて来た。

十二月二十五日疎開学園を閉じ、児童は思い出多い羽村を後に横浜に帰った。

### 三、疎開から帰って

横浜に帰った伊藤先生は「復興はまず精神より」と、高山安恵先生（現在の正木夫人）の協力を得て、近所の子供たちも合せて山手日曜学校をはじめた。集まる子供たちは少なかったが力強い復興の第一歩であった。そして、三月には第四回の卒業式が行なわれ、六名の卒業生が上級学校や社会に巣立って行き、四月には新しく十二名の新入生を迎え校運発展の途をたどった。

当時は非常な食糧難で、ぼ米は十日分しか配給がなかった。そこで當時上の道路の向う側はフェリス女学院のところまで草原であったので、これを開墾し、畑となる所は全部耕し、聖ヶ丘、恵みの谷、などと名づけ甘藷、麦などを作った。当時の生活は午前中勉強し、午後はサビで手を赤くし、焼跡の整理、手にマメして畑の仕事をした。

この頃は食糧のみならず、凡ての物資に乏しく、全部が町内会を

通しての配給制であった。この時に当り、伊藤先生は学校経営という忙しい仕事の中に進んで町内会の世話を引受け、全く「社会奉仕を旨とする」というイエスの友の綱領を身をもって行なう、実に忙しい毎日であった。山手東部町内会四組の組長をされ更に町内会副会長に選ばれ、相当広い範囲にわたり味噌、醤油、魚、ジャガイモなど一切の配給物の世話をされた。これのみならず、上級生の男子と共に町内の新聞配達を無料で引受け非常に感謝された。

七月には創立記念日を祝い、八月の夏休みには約一週間、疎開中色々と御世話になった懐かしい羽村の下の水泳場に林間学校を開いた。また秋の一日、保土ヶ谷遊園地に運動会をかねて遠足に行つた。

この間、第二学期には千葉周邦先生が退職され、山鹿唯一、森三郎両先生が就任され、また国領、島貫両先生が退職、倉橋八重子先生の就任を見た。

十二月のクリスマスには「来れ、主を拜せん」という劇をして、主イエスの誕生を心から祝った。このクリスマスで忘れることのないことは近所に住むアメリカ軍人ジェンキンス夫妻の助力により、羽村からピアノを運ぶことが出来てこれに合せて讚美歌をうたうことの出来たことである。

ジェンキンス氏はエンヂニアの軍曹で、その奥さんは二十年間社会事業にたずさわったこともある方で、二人共熱心なクリスチャンで学校と道一つへだてた所に住んで居られた。高山安恵先生（現正木夫人）との不思議な縁で水上学校を知り、当時窮乏のどん底に



あった水上学校に、本国の母教会を通して衣類や、食糧を援助して下さった。また畑仕事などの過労の為病に倒れ、再起不能と見られた伊藤先生に当時貴重な滋養物を贈られ、先生はこれによって快癒したとも言えるのである。その後帰国されるまで、こちらで関係する教会の婦人会などを通してなされた物心両面の援助は水上学校にとって忘れることは出来ない。この主イエス・キリストにあっての温い御援助はケリテ川のエリヤとカラスを思い出す生ける神の助けであった。

この時代は日本の国自体にとっても終戦直后で混乱した時代であったが水上学校にとっても非常に困難な時代であった。

昭和二十一年(1946)の秋頃より経済的危機に襲われ、次の年の一月二十四日の神奈川新聞に「水上学校閉鎖の危機——伊藤氏の三十年の苦闘空し」という見出しでその危機が報ぜられた。終戦に伴なうなぎのぼりの物価に、伊藤先生はその財産持物、衣類など四十人の児童のためにすっかり売払い、洋服はコールテンの詰襟一つになっってしまったが、子供たちには困っている様子はなるだけ見せないように苦心された。当時、児童一人から五十円を徴収していたが、食べざかりの児童の身の廻りの世話一切には、少くとも一人一ヶ月九十円はかかり赤字が積まれて行った。当時水上学校への公の補助は神奈川県より七百万、横浜市より二百円、合せて僅か九百万で、これではインフレの波を乗切ることが出来ず、自営の道も立たず、閉鎖か、公立移管かの岐路に立つという悲しい記事となったの

である。

この新聞記事を見て、当時磯子において鉄工所を経営しておられた長谷巖氏が翌日来校され不足額の分担を申出られた。

この経済的輸血により学校は危機より救われ立直ることが出来た。長谷氏は初代会長小栗孝三郎氏亡き後、第二代水上児童愛育会々長になられた。

疎開から帰って焼残った牧師館と平家屋に起居、勉強していたが、その狭隘は如何ともし難く、復興建築の必要が痛感させられた。

昭和二十二年(1947)三月一日、会堂跡に復興建築を始め、材木に切込みが始められて間もなく、元ユニオン・チャーチの代表者が来られ、学校の再建は後で移転をお願いするような結果になるかも知れないから見合わせて欲しいとのことであった。そして、昭和二十三年五月、聯合國財産としてその不動産を全部返還することになったのであるが、全力を挙げて努力し購入したこの建物を無償で返還せざるを得なかったことは、敗戦の結果とは言え苦しい経験であった。

この結果、戦災跡に復興することを中止し、新たに土地を物色した。最初現在のヨットハーバーの土地を希望し交渉したが成立せず、山手町一三九番地の一、二、一四〇番地の甲、乙の現在地総坪数二六二七坪五六を当時山下町八番地に在った日本造船株式会社から二十二万三千円で譲受けた。その頃この辺一帯は関東大震災以来

家も立たず一面の草原であった。今でも夜、フクロウの声がし、横浜にこんな所があるのかと思われる程に静かな所で、子供たちのためによい環境である。天与の地として感謝せざるを得ない。

ここに移転建築を決し、県はじめジェンキンス夫妻などの協力により約百万円の基金が与えられ、現在の本館（木造二階建延一〇三坪七五）が建てられ、昭和二十三年（1948）十一月一日、待ちに待った校舎に移転、水上学校にも春が訪れてきたのである。

この間、山鹿、森、青木の諸先生が退職され、新たに増田綾子、島田進一郎、別府信男、中村泉、新国富美子、橋口逸記、八寿八泰子の諸先生が就任された。

## あとがき

昨春秋、内山譲先生より故伊藤伝先生の伝記の執筆を依頼されました。その時の執筆者の条件として、第一に信仰のある人。第二に生前の伊藤先生を知っている人。第三に文筆の才ある人ということでした。私は文筆の才に欠ける者であり、生前の伊藤先生を知っているという程に長い間の交わりもなかった者ですが強くすすめられましたので、敢て自分の力を省みず、最後の御奉仕と御引受けしました。

しかし乍ら私事のために責任を果し得ず、伊藤先生の昇天の記念日を迎えてしまったことは何とも申し訳ない次第です。

心から御詫びいたします。

最初、日本水上学校の紹介をかねたものという点から、伝記にす

るか、学校史にするか問題がありました。元々日本水上学校と伊藤先生とは切り離して考えることの出来ないものであり、日本水上学校の歴史を辿りつつ伊藤先生について記しました。しかし、唯単なる過去の出来事の羅列では真の意味で歴史と言えず、そこに記者の解釈がなければならぬと思えますが、その点で歴史とは言えず、また、伝記としても不十分であります。唯伊藤先生が書き残された文書などの資料を見せて頂き、少し整理したに過ぎません。

故に「日本水上学校と伊藤伝先生」という表題にしました。

昔の人は歴史書を「通鑑」即ち「鏡」と呼び現在を正しく知り、将来への幻を明確にしようとしたが、私も計画としては最後に「水上生活者の現状と将来への展望」と言った一章を設け結論づけようと考えたのですが、そこまで行かなかったことは残念でなりません。願わくは今後どなたかが、伊藤伝先生の伝記なり、日本水上学校史を書かれる時少しでも参考になれば誠に幸いです。

また伝記、或いは学校史の完成される日の一日も早からんことをお詫びと共にお願いする次第です。

これを書くに当って伊藤先生に関係のあった方々、旧職員、並びに卒業生など多くの方には御協力頂きましたこと心から御礼申し上げます。

昭和三十五年（1960）四月十日

伊藤先生召天記念の日

学園にて 柿 沼 慎